

つくばエクスプレス 駅機能のあり方勉強会 報告書(概要版)

「駅機能のあり方勉強会」の趣旨

(背景)

TX プロジェクトは、沿線開発と鉄道整備の一体化を基本コンセプトに整備がすすめられ、運輸省・建設省・国土庁での合同調査等を経て、首都圏での宅地供給を目指した一体化法※を活用して第三セクター(沿線自治体出資)により実施され、沿線開発と鉄道整備の一体化を基本コンセプトに整備がすすめられ、開業後約 20 年を経て、沿線自治体や民間デベロッパーなどによる沿線開発と共に、利用者も増加し鉄道運営もかなりの成果が認められている。

今後も、TX のブランドイメージの向上による沿線の路線価値のさらなる拡大は、地域、鉄道事業ともに重要な課題である。

※一体化法

大都市地域における宅地開発及び鉄道整備の一体的推進に関する特別措置法(1989 年)は、宅地開発および鉄道整備を一体的に推進するために必要な特別措置を講じた法律。TX 整備にあたっては、沿線自治体出資による第三セクターの鉄道会社を設立し、自治体施行の区画整理事業により鉄道用地を確保し鉄道を建設した。

(目的)

2025 年度に開業 20 周年を迎えることを勘案し、一体化の便益発生源である「駅」に関し、将来のさらなるブランディング向上の一環として、駅機能のさらなる向上など、駅機能のあり方について、当社の 象徴的なターミナルかつゲートウェイ駅である「つくば駅」をモデルに学識経験者や関係者による勉強会を設置し、幅広い検討と議論を行ったうえで、今後の駅機能のあり方についてとりまとめを行うことを目的とする。

第一章 はじめに

- つくばエクスプレス(以下「TX」という)の事業は、特別な法律に基づき、鉄道整備と沿線まちづくりを、法律に基づく事業計画のもとに、それぞれの役割分担で進められ、開業20年を経て、沿線人口は増加し、鉄道需要も順調に増加し、鉄道事業と沿線まちづくりの一体的整備は成果を発揮したと言える状況に至っている。
- 今では、TX 沿線は、環境に恵まれた住宅、商業施設、最先端の教育・研究機関や産業の集積、文化発信や観光交流の拠点等といった、多様な賑わいのある街が形成されている。さらには、厚生労働省の国立社会保障・人口問題研究所の予測によれば、これからの人口減少時代の中にあっても、TXの沿線人口は2045年頃に向けて伸び続けるということであり、首都圏の中にあっても人口増を通じた発展を継続できる稀有なエリアとなることが見込まれている。
- 沿線には若い世代の移住も進んでおり、高速で効率的な鉄道輸送に期待するほか、環境問題、バリアフリーなど社会的課題への関心の一方で、個々の生活の充足感を重視する指向性も強く、こうしたニーズに応える鉄道および沿線への期待も強まってきている。加えて、増え続けるインバウンドへの対応や、高齢者、障がい者を含めた多様な旅客層への対応も、より強く求められている。
- そのため、鉄道事業としては、「安全・安定・安心輸送」の確保という基本の徹底を継続するとともに、混雑緩和のための8両化の推進、また、インバウンド旅客や高齢者、障がい者を含めた多様な旅客ニーズに対応したサービスの向上を着実に進めることが第一となる。また、今後は、多様な旅客ニーズに応えつつ、「快適性、満足度、楽しさ、幸福感」について個々人の価値の追求に応じていくことも模索する必要がある。
- また、鉄道整備及び沿線まちづくりが一定の成熟段階を迎える中で、沿線の各地域ではTX が生活に浸透した身近なインフラとなっている。TXを運行する首都圏新都市鉄道株式会社(以下、「首都圏会社」という)は、第三セクター鉄道事業者として、これまでのほぼ鉄道事業専門の役割のみならず、鉄道駅からつながる駅前や駅周辺施設に及ぶエリアに向けての連続的な駅まちづくりの取組みにおいても、自治体、民間企業等の皆様と連携して積極的に貢献することが求められている。駅構内外、高架下などの鉄道施設は、商業に加えて、地域活動や公共利用への利活用も期待されるところ、鉄道事業者として必要な収益性を確保しつつ、地域に貢献することにより、沿線の発展や沿線価値の向上に寄与することができる。
- さらに TX には、今後、沿線の街や沿線に暮らし、働き、訪れる人々をつなぎ、沿線に集積した最先端の科学技術、上質な文化、スポーツ、自然環境等の潜在力やシナジー効果を引き出す、広域インフラとしての役割を果たすことが一層求められる。沿線の街と連携を深めな

が「何世代にもわたって地域に愛される鉄道」を目指す TX の取組みは、長期にわたってのサステナブルな鉄道および沿線の発展のために重要である。

- そこで、鉄道事業の要となる拠点であり、同時に、沿線地域にとっての顔であり、表玄関である鉄道駅に着目して、駅の様々な機能について検討を行った。検討にあたっては、様々な分野の有識者、自治体、観光・まちづくり等の関係団体、民間企業の皆様に参画いただく勉強会を立ち上げ、上述のような長期的なビジョンも踏まえつつ、鉄道事業としての基本的な機能から、沿線のまちづくりや地域への貢献、多様な利用者のニーズや社会的課題への対応など今後に向けて求められる機能まで幅広く検討を行った。
- 今年度は、「つくばエクスプレス」の名称から見ても象徴的な駅であり、また、ゲートウェイであり、かつ、デスティネーションである「つくば駅」をモデルに、現地視察やつくば駅の利用者に対するアンケート調査を行いながら意見交換を重ねた。但し、つくば駅は、地下駅であり、また、改札外は県道の下ということで、制約条件も多い駅であることには留意する必要がある。

第二章 論点ごとに示される課題及び今後の方向性

1. 駅機能のあり方について

第一章で述べた視点を踏まえると、駅の機能に関しては、以下の論点ごとに議論を行っていくことが必要と考えられる。

① 顔・表玄関としての駅に求められる役割・機能・視点

まずは、駅機能の基本となる、利便、安全、案内、清潔、バリアフリーなどの基本機能について点検するとともに、さらに、デザイン、商業機能、コミュニティ機能、地域の情報発信（つくば駅については特に筑波山などへの観光、科学技術の街であること、地域産品）などについても幅を広げて議論を行う。

② 駅を起点として、駅周辺施設等に及ぶ連続的な取り組みと求められる関係者間の連携

駅は、鉄道施設の中だけに限定されるのではなく、駅前広場、駅周辺施設等へとつながる中で、まちづくりとも連携して機能がより効果を発揮する。街にはまちづくり団体をはじめとし、多様な団体がまちづくりに取り組んでいることから、そのような団体と連携していくことが必要である。また、こうしてつながっていく施設は、自治体や民間の関係者が所有、運営管理するものであり、こうした様々な主体者との連携の場の構築も議論する必要がある。

③ TXの駅・つくば駅としての個性（「らしさ」）、ネットワークとしての統一性・象徴性（ブランド力）

上記①②の議論にあたっては、TXの個性「らしさ」や20駅のネットワークの統一性、象徴性（ブランド力）とは何かを意識していくことが必要である。これは時代の変化の中で常にエッジを利かせ、陳腐化することのない価値の追求が求められる。そうした視点での取り組みをどう行うのかストーリー性も含めた議論が必要である。

④ 沿線全体の発展に向けた高架下利用のあり方

鉄道側としては、鉄道駅の構内外だけではなく、高架下の活用についても、商業利用に加えて、地域や公共に貢献する視点を持つことで、沿線まちづくりにおいて効果的な取り組みを行うことができるのではないかと。このような観点で高架下の活用についても議論を行う必要がある。

⑤ 駅における情報発信の対象や方法

駅の構内外の空間は、沿線の発信力を高める格好の舞台となる。その発信は、20駅のネットワークを活用することにより効果はさらに高まることとなる。このような情報発信機能を有する駅としての機能についても議論を深める必要がある。

前述の5つの論点について、本勉強会の中で、具体的に示された課題と今後の方向性は以下の通りである。

① 顔・表玄関としての駅に求められる役割・機能・視点

(1) 駅の印象の改善(or ランクアップ)

- おもてなし感(ウェルカム感、行ってらっしゃい感)の創出
 - ハード面:ディスプレイ・照明の工夫などによる明るい空間づくり
 - ソフト面:店舗の閉店時間や重複感を感じさせない運営の工夫、設備の修繕や清掃等の徹底など
- 「わかりやすさ」と「居心地の良さ」をつくる
 - 地上までを含めた空間のわかりやすい案内(難しい地形だが案内をわかりやすくすることが重要)
 - わかりやすい誘導導線をつくる(目的地が自然にわかるような空間づくりと必要最低限のサイン、通勤者・観光者の両者にとってのわかりやすさ)
 - 駅は通り過ぎるだけではなく、住んでいる人の居場所となる滞留空間として、どう日常にそこに居られるか
 - 駅周辺(センター広場など)の資源を活かした歩行者・滞留者を繋ぐ工夫が必要
- 「暗い」印象の改善
 - 照度は確保されていることから、色合い(色温度を低くする)で温かみある光環境へ
 - グレーを基調とした色と素材にも暗さを感じるところがあることから、素材を替えるなどの改善が必要

(2) 駅の基本機能の改善

(案内やサイン)

- 案内板(周辺地図)の配置
 - 導線と案内板の配置の整理(地図として「まずここに行けばわかる場所」を作る)
- 動線や案内の個々の改善
 - 改札階の人の交錯が改善されるよう、安全で円滑な流動動線をつくる
- 各出口への案内のあり方
 - バス乗り場への案内の強化(筑波山シャトルバス、路線バスなど)
 - バリアフリー動線の案内(改札階から踊り場まではESがあるが、踊り場から地上までは階段のみとなるA1・A5はより丁寧な案内が必要)
 - 鉄道・バスが一体となった情報提供(音声ガイダンスなど)
- わかりやすさ(必要な情報と愛着を持たせるための各種情報発信)
 - 床面サインも含めた視認性の高い立体的なインフォメーション
 - トイレ等への案内(ユーティリティ機能の充実)
 - 必要なサインとその他の愛着を持てる情報の整理

- デザイン(フォント等)を意識した視認性および統一性のある情報発信

(設備)

- トイレの改善
 - 清潔さの保持のための清掃の徹底および必要に応じた改築
- その他設備の改善
 - コインロッカー、ベンチなどの利便設備の機能充実(必要な場所へのベンチの設置など)

(自由通路)

- 施設内店舗の閉店時間の多さへの対応
 - 閉店時間でも情報発信などで来訪者におもてなしや案内ができる機能の設置
 - ディスプレイ・照明などによるウェルカム感の演出
- 施設の清潔感
 - 設備の修繕や清掃の徹底等

(多様な利用者への対応)

- 観光と通勤通学それぞれの機能、高齢者、障がい者、外国人など多様なレイヤーへの対応
 - 通勤・通学者の混雑時における機能的な誘導
 - 筑波山等への観光者、研究機関等への業務来訪者など多様な来訪者に対応した丁寧な案内提供
 - 障がい者、子連れなどペースの違う来訪者の移動の円滑化
 - 外国人(観光客、国際会議場来訪者、研究機関への来訪者等)に対応した案内提供

(3) つくば駅に求められる機能の改善

(観光案内所)

- 観光案内所への導線
 - 筑波山登山など「観光を楽しむ街に来た」という人たちにとって使いやすい機能(休憩場所や荷物を整理できる場所など)の充実
 - 地域と駅を繋ぐ一体性が必要(駅からの繋がりが無いことが課題)
 - 駅構内における地上(Bivi)の観光案内所に関する情報発信
- 駅における観光案内機能
 - 地上(Bivi)の観光案内所へと繋ぐ、秋葉原駅の TX プラザのような機能の設置

(研究学園都市と筑波山観光の拠点)

- 大学との連携、スマートシティ、ロボット技術などつくばの科学技術の活用
 - つくばにしかない科学技術をアピールすることで強いインパクトを残す
 - スマートシティの実験、ロボットの導入などポイントを絞った展示などによる斬新なアピール
 - 大学との協働による発信
- 筑波山観光のイメージの形成
 - 「筑波山を表すもの」の展示(植物の写真など)
 - 山登りの方向けの店舗(商業施設(Q't))への誘導や設備の整備

② 駅を起点として、駅周辺施設等に及ぶ連続的な取り組みと求められる関係者間の連携

(共創の体制づくり)

- 駅機能は駅で完結するのではなくて、駅周辺と駅が一体となって機能
 - 街と駅が一体となって機能を揃える
 - 駅と地上が一体となったサインの整備
 - 回遊性を持たせるための駅と街の連携(機能、人の流れ、滞留等)
 - 地域関係者との連携によるイメージづくり
- 関係者とコンソーシアムを形成。鉄道側も参画すれば現在の活動は活性化
 - 自治体やつくば駅周辺の既存の地域のまちづくり団体と連携し、更に多様な関係者が参画するなかで、駅をも考えた街のエリアマネジメントを拡大していくことが必要
 - 既存の組織を活かして連携体制をつくる
 - 関係者間が情報を共有し、相互理解を進めることが基本

(導線・空間の連携)

- 駅、駅前、センター広場へのつながり(高低差の克服、案内表示)
 - 高低差のある街の構造のバリアを克服する工夫(駅周辺施設の情報案内の充実)
 - 連続的な空間づくり(案内・情報等による誘導)
- 観光案内所への導線(①と同旨)、観光案内所の露出(iマーク)
 - 地上(Bivi)観光案内所への案内・情報によるわかりやすい誘導
 - 地上(Bivi)の観光案内所へと繋ぐ、秋葉原駅の TX プラザのような機能の設置
 - 案内所マーク(iマーク)による案内所機能を強調
- 周遊性、回遊性の創出
 - TX 沿線の魅力的な情報提供による周遊性の創出
 - 駅、地域それぞれが「外向きの顔」を作って街の賑わいをつくる
 - つくばへの来訪者(観光・ビジネスなど)に向けた駅構内での周遊コースの発信

③ TXの駅・つくば駅としての個性(「らしさ」、ネットワークとしての統一性・象徴性(ブランド力))

- TXらしさの追求、ネットワークとしての統一感
 - TX が誇る「安全・安定・安心輸送」に加え、「沿線地域とのつながり」を TX らしさとして追求する
 - 「人の行き来」そのものが駅のアイデンティティ。「人」が可視化されることが重要(駅や広場を行き来する人、街に滞留する人など)駅に必要な機能を確保した上で、個性を出していくことが必要。エッジを利かせた TX のブランディングの発信
- TXの歴史の展示(ブランド力の一つになる)
 - 駅構内に TX 博物館を作り、変遷などを発信し、より身近に感じてもらう
 - 地域の魅力(歴史・文化など)を伝える展示施設の設置
 - 展示の定期的なメンテナンスや情報更新
- TXとしてのストーリー性、全体コンセプトがブランド力
 - TX をゾーン、ラインとして捉える(各駅での「独自のらしさ」と TX 全体としての統一感をつくる)
 - 全体のコンセプトの統一性やストーリー性を持ち、来訪者のニーズをよくくみ取り、共感をしてもらうことが重要
- TXネットワークの活用
 - TX 沿線の街の情報(駅情報、地域情報、イベント情報等)を TX 各駅で発信することで、沿線の一体感が生まれるとともに、駅間の人の流れも生まれる。
 - ネットワークを活用した地場産品などの宣伝、販売
- つくばらしさを感じられる駅
 - 通勤通学者、観光者、業務での来訪者など利用者が多様であるつくば駅では日常と非日常のミックス感をどう落とし込むかが重要
 - 研究学園都市としてのイメージ創出(科学技術や大学との連携などの発信)

④ 沿線全体の発展に向けた高架下利用のあり方

- 商業利用だけでなく、地域貢献、公共貢献の視点も重要
 - 高架下を活用した市民が集まれる場所の設置
 - 高架下を活用したイベントやお祭りなど、地域の人が集まる催しの実施
- ヒューマンスケールの重要性。高架下が最適な環境
 - 「ヒューマンスケール」の機能(公共空間、お店、保育園等)の設置
- 各世代のコミュニティ、アート
 - 次世代が主役となるまちづくりとして「若い人の居場所」が重要
 - コミュニティの場(スケボー、アート等でコミュニケーションができる場)としての活用
- 駅周辺での回遊性
 - 高架下は少し離れた施設と駅を「つなぐ」役割も果たす
 - 駅から出てつながる先の見える化や歩行者ゾーンの形成などで歩行者中心の回遊ゾーンをつくる
- 駅間の回遊性
 - 駅相互で送客し、TX が軸となって回遊性を生む仕組みづくり(定期券の活用など)

⑤ 駅における情報発信の対象や方法

- 各駅における沿線情報の相互発信
 - 自駅の情報以外に他駅の沿線情報を発信することで、住民はじめ訪問者が他駅に訪れる「回遊性」が生まれる
 - 駅や地域の情報を多主体が発信することで、有益な情報が広まる
- 駅周辺施設における TX の時刻表等の情報発信
 - 訪問者へのゆとりを持った回遊・周遊の提供が可能
 - 鉄道情報に加え、バスやタクシー等二次交通に関する適切な情報提供
- わかりやすさ(必要な情報と愛着を持たせるための各種情報の発信)
 - わかりやすい誘導導線をつくる(目的地が自然にわかるような空間づくりと必要最低限のサイン、通勤者・観光者の両者にとってのわかりやすさ)
 - 導線と案内板の配置の整理(地図として「まずここに行けばわかる場所」を作る)
 - 床面サインも含めた視認性の高い立体的なインフォメーション
 - 利用者が愛着を持てるようなブランディングのための情報発信(電磁媒体を活用した TX の歴史等をプロジェクションマッピング)
- 駅だけでなく、TXホームページ等における各駅沿線イベントの発信
 - TX ホームページにおける沿線地域情報の発信
 - 「筑波山に行くなら TX」を前面に出した観光情報の掲載
 - 地域自治体サイトの関係情報とのリンク
- 利用者を意識した情報発信
 - 利用者の視点から見た情報施策のコンセプトづくり
 - ・必要な場所に必要な情報の掲出
 - ・誘導と案内に関する情報発信の適切な配置(必要によりデジタル技術の活用)
 - 映像によるリアルタイムでのイベント等の地域情報案内の発信
 - ・情報のとりまとめは一元化することが重要

以上の課題及び方向性については、引き続き取り組んでいくものとし、具体化にあたっては、事業の優先性を検討した上でロードマップを作成していく。また、地域関係者とともに連携して実施すべき課題及び方針については、引き続き議論や検討を行い、より良い方向性で、積極的にトライ&エラーで取り組みながら、目標の実現に向けて取り組んでいく。

第三章 終わりに

○ 開業20年を迎え、各駅ごとの特色も出てきている。その中で、つくば駅は第一章で記述したとおり、TX を象徴する駅。駅周辺の関係者の熱意も強く、イベントも頻繁に開催。この勉強会の機運を生かし、鉄道、自治体、まちづくり関係者等との双方向での意見交換や情報交換を通じて、駅、駅前、駅周辺施設との連携型の取り組みを推進。首都圏会社も、この取り組みに積極的に貢献していく。

○ これまで基本、役割分担をしながら進めてきた一体的整備は、基盤を形成するうえでとても効果的であった。今後は、その基盤の活用の段階であり、人と情報の役割がより重要である。また鉄道側とまちづくり側は、様々な観点でより良い価値の形成をめざして、ウインウインのパートナーとして「共創」することが重要である。

TXは鉄道路線としてネットワークを有しており、そのネットワーク力を活用することは沿線まちづくり活動の強化にもつながる。

○ よって、今回の勉強会はこの報告をもって活動を終了するのではなく、今後の連携活動のプラットフォームとして機能していくことが重要と考える。

具体的には、第2章に示された個々の課題及び今後の方向性については具体化に向けたロードマップを作成することとしているが、そのロードマップの作成及び実行について、この勉強会がフォローしていくことが必要である。

加えて、今回の勉強会において、鉄道事業者、自治体、民間、大学、まちづくり団体等の関係者での連携の場が育まれてきた機運を生かし、この勉強会が、駅とまちづくりのあり方について関係者間での「共創」を図る場としてコンソーシアム的な機能に発展するよう引き続き努力を続けることが大切である。

また、つくば駅におけるこのような取り組みをそれぞれの特性を踏まえつつ、沿線の他の駅にも展開していくことにより、TX 沿線全体としての価値・魅力・ブランド力の向上が期待できると考える。